

沖縄ん 建築紀伝

横断する眼差し

■ 5回 ■ 国場幸房(建築家)
國場組新社屋ビル設計で奮闘

一九六七年に沖縄に帰り、兄幸一郎が設立していた国建に入社し、建築設計部の一部をまかされた。建築とは元来、人間と自然との対話で出来上がった文明であると考えると、地域、風土によって建物の形態は異なるはずである。これらの事を、これから沖縄の先人たちの知恵をかりながら探求しなければという思いで使命感を抱いていた。

そのような考えをしている時期に、國場組の新社屋ビルの計画が持ち上がっていた。計画地は、戦前、國場組本社があった久茂地川沿いの区画整理によって一部公園に削られた四〇〇坪の全面道路の四角い敷地であった。道路を挟んだ前面が川で、後ろ面が公園になっていて、旧法規での斜線制限を受けない場所である。構造審査会に適應しない四五m以下で計画を進めた後日聞いた話では、建築主である國場幸太郎社長は四々五階建ての本社ビルを予想していたらしい。兄幸一郎から伝わった話は、同敷地に来るだけ大きな建物を造ることであった。

その頃、本土では、旧建築法規の三二mの高さ制限が見直され、日本初の超高層建築の霞ヶ関ビルが完成する。至る所で容積率制限による高層ビルが計画されていた。沖縄においてもそ

ろろ新しい法規の適應時を視野に入れていた。風土と建築を考え続けていた時だけに、高層事務所ビルにこれらの要素をどのような手法で適應させるべきか悩んだ。まず、本土で当時流行していたカーテンウォールの手法は取り入れないことからスタートした。沖縄の強烈な日差しやスコール、さらに塩害に加え、停電やその他の理由による窓の開閉、清掃等のメンテナンス、防災等の様々な条件を考慮した。それで底を兼ねたフレームを取り入れた。その底の先端に柱を配置し、人間が通れる二七cmの隙間を設けた。そのことにより多くの問題を解決した。沖縄の民家の手法で見られる雨端による彫りの深さと中間領域的空間の創出が出来たと思う。



工事が始まると、現場好きの幸太郎社長はいろいろ指示を出していたが、現場担当者には社長が見えたら「幸房さんに直接伝えて下さい」という指示を出してあった。社長との対立は依然として続いた。國場組の先輩方の助言では「社長は早朝の方がご機嫌なので、自宅へ訪ねた方が良い」というアドバイスを受け実行したが駄目であった。とうとう「ワシが金を出して、ワシのビルを建てるのに、何故ワシの云う事を聞かないのか。ワシはこの道五〇年で、オマエは何年建築をやってきた」と社長に怒鳴られる始末だった。私自身は若さも手伝って、國場組から仕事を依頼され、國場組の社員のためのビルであり、これだけ大きな建物となると社会的な

責任があると考えていたので社長に反論するわけにはいかず、黙々と抵抗を続けた。とうとう、甥っ子の中で一番の頑固者扱いとなった。

総工事費は百八十万円で地下三階、地上十二階建てで延べ床面積約四八〇〇坪の規模である。一般的には約二分の一の三六〇坪の坪単価で出来たことになる。工事に關しては当時の国建の社長でもあり國場組の工事支配人でもあった兄幸一郎が中心になり、資材等の調達に努めていたようである。私は設計の方で随所に経済設計の手法を取り入れることにも努力をした。例えば、矢板無しのオーブンカットで施工出来るように地下三階の面積を小さくしたり、またサッシの型材の断面を単純化するなど、ガラスの大きさもハギレの少ないようにサツシ割をしたり、外装内装面にも工夫を凝らし、新商品の吹き付けタイルを内外壁面の仕上げ塗装として統一。一二五〇ミリのモデュールも採用した。鉄骨も実施設計の段階でGコラムに変更された。その当時、最新の技術であったデッキプレートを使用しスラブのコンクリートを打設した。それは、工事故や工期短縮に貢献した。玄関ホールの石張りは石材部にある他の現場の残材を利用、建物周りの犬走りには國場家の郷里の近くのヒジャ川から玉石を運びモルタルに埋め仕上げた。

竣工祝賀会の席で、いろいろお褒めの言葉を頂いたらしく、会の後の夜の宴会の席を早々と抜け出した幸太郎社長は、数人が現場小屋で慰労会をしている中から私を呼び出し、暗い中を二人で改めて建物を見て回った。しばらくして、言いにくそうに「ナア シムサ(もう許すよ)」と一言。それから沈黙が続いた、山原の貧困の生活から出発し、苦勞を重ね、兄弟で力をあわせて、國場組を設立してきた思い出等が走馬灯のようにこみ上げてきて感慨にふけて居るように思えた。

そのような経過で私は参加して、新社屋である國場ビルは一九七〇年三月に竣工した。当時は、那覇市の広範囲からも視野に入る高層ビルであり白くそびえていた。那覇の市街地のスカイラインが都市的なイメージを獲得する起点をもたらしたと考える。竣工後の一週間は祝いも兼ね、夜中も全照明を点灯しライトアップ。首里の丘を初め遠方からの夜景に彩りを添えランドマーク的な存在だったようである。

復帰前の沖縄では、本土復帰に対する様々な不安が巷の噂になっていて、丁度その頃に、國場組が大規模な高層ビルを建てたことで、それらの不安や憶測の一部が解消された話を聞いたことがある。竣工後は幸太郎社長と顔を合わせた機会も減り、たまに会うと、懐かしそうに「ヌーオンチ、チカグロ、チラ、ンジャサンガ(何でこの頃、顔を見せ無いか)」と仰せられたので「ウンジョー、チラ、ンジャシーネー、シグヌライルスムンヌ(あなたは、顔を見るとすぐ叱るものだから)」とジョークを込めて返事をすると、苦笑いされた。

竣工一年後、國場組創立四〇周年記念祝賀会が同ビル十階ホールで開かれた。勤続年数の功勞者に対する表彰等があり、最後に、社外関係者である私に、國場ビルの設計者としての特別賞として賞状と柱時計の記念品を頂いた。

数多くの役職を持ち、多忙な幸太郎社長であるにも関わらず、繊細な気配りを頂いたことに改めて感動した。國場ビルの設計に關する設計意図を貰ったことにより、頑固者扱いもされていたが、そのお陰で、しばらくして始まった「ムービーチリゾー トホテル」の設計の仕事にも、それらの事が活かされたと思う。

